



游

日

合

本

茶

書

五月



世に能く治れり多しやあつては
と云ふ所は法書小も傳ふ多牛に行すとも
りふ魚一丁後とも工案れ法を示す
一しめ格式の法度をかひ切字れ沈白
を双魚く虚實れ變化を揚せしむそ
娑情いつきをの先とせん曲言は知す
多れれ中教向と句他とれ表あを無す
仲用の捌をらす魚ま扱ひの程をあらは
しうあし多き句のさ海やるあとなをん得
る人も少くすとそ古人もよく其書を

知事とも弘く示さるべき事なれ世々云
見ん所取の凡士ありて人の言遠に
馳るも其業は六籍しつゝさるゝを
深く思きてやう海し志うれは事れ
まゝ象に秘し彼も小隠し多傳あり
人指を傷も小多うしし僕既六十
年れ春秋を強多著るし昔八日に
他し夜も小思ひも古新れ風骨を
あつす只能得れ日庸と古人の嘲嘆
きし小思ひもす漸中年れ此世風の

門不入多蕉門の安傳百箇条を始て
胡蝶れ林又或覺し一年れ修りを
臨へりらんとりんと抑自在れ自在
きり吾の門れ能得岷百條もそんや
百もいふハ多数の中位も多節もハ
子萬もあり多く時を十一も定る係も
執中の名目と知れしそ事の中は
二三を記しあゝ教句造立れ道を
示さんやんし付書を見んあれり
此事事かりきし此れ於九年一毛と

今吾より後付道小入らん人可
我知教此扇を唱らんも不承の海
しくや老鯨舞記

蕉門百箇條初篇をく七

歌の句工業秘傳

一 和歌は傳ふ云歌は前ハ佛小向ひて誤嘆をるるに
種々此傳をるるありと和歌は落歌行歌傍歌の種吟味多し
る魚一歌をるるあり一其此揚歌後るるありと和歌は
其もくはぬる和歌小をるる一深く其意をく歌を又
其入るるありと其歌も其は虚字実字れ見可傳
一其もくはぬる和歌文字を傳へてハ其後く其は文字
其又日歌の音ハ其ありと其もくはぬる和歌は其は
其ハ其もくはぬる和歌を其は其は其は其は其は其は

漬く如くをさきそへハ命より多花を朽
 家路を忘きて紅葉をきりしんこく其物よみ終
 さしをぬく懐くは法より人のま併よ向い
 能くむんはるのこく一但歌よりてるは法を
 屋敷やちとさうたよハ郭とあるハ山智を
 じよこめやんをよく嘗のよさハ初心をよめ
 多つて笑ういらとよよ又麻の香ありハ
 んをきくあはれなるはしハあとも初く
 いふくやハ事果なり秀白ありハ
 家路一亦様とはあめさや柳をハきり

初音あをハ初人をよめて時多敷をよは
 とは命小くあけむをりハ紅葉といは
 海とあまらるをん得如ハ敬実をきく
 古奇なるも思ひとよめられハ
 正風沈語歌のウユ素又右の傳を以て
 をよめ箱よ入をよめ蓋よ上高廣く
 云く是一方れ教く又云余白ハ
 花の匂をせん風よ教くともり
 面白く寸入おにちりとも風
 白くも海ら鳴をそへハ
 四

那がー下の子とそまぢと小嶋おそく流く寸又曰物
まこととも云魚ーやんよハ物まきか流くーてよく
下ハ物まきとむつーくしあふ流くー寸相葉さ
と歌の内より葉す時とん換く亦より求まらぬと
そそ流るんと也是又一端の教之歌の内亦とも
葉屋ま道ハまれた初ん申おれ人小示さんハ先と
より亦を分けて庭訓と寸口傳

一 祖翁辛海れ松の句小葉句才三平句れ松守を他人
多曲草の地の之般小定る是を勝傳授と云

葉句 辛海れ松と花より終あま

才三 わらさ兒の松とまは秋勝小

平句 唐海れ松を春の夜見後て

右の位をひま工葉まー祖翁の句小名人の變化
まま就古れ規矩にまらふは吟多くと口傳源一

一 祖翁の門人小示れハ其人これ叶は口實おより
てあまハみ天の言小氷をけらるんあさるはあま
く作まへーやま又詞をほく傳守ーやま行のふ
ハ句にまを入るう可と云又一字も併小葉屋ま
やま皆其人ハの病を除屋ま垂示れ一様めて
孔ま子の七子に言あまのあまー一行小園屋ま

かく三月ハ何事をうるとせん例の惑を解るる日
るらん先づ格の平一記を宛初小修りしてよき
師小修ひ高上事の後変化とて人の名より一
きくは也

一 祖意の曰あるハ元合相く物二行元何をせしう元
そやすをよとそや也是別和哥よ云とせ相を合せ
うけ合の傳也

一 祖意或人小示て曰汝々各各物を二三つ元合事の
白をすす各各ハ只金をお延きらんよとく傳す
や也是すの和哥の一体なり右の只傳を執得

一 多教白も如くやとけふ句教或ハ一房ハ
十歌二十歌もいへり別多後組歌をさうもあす
百句といふ句一をさつさきも次もさし師よはいて
推教をも回ふ也一刺の詞をもも事ハ其傳法ハ
吟味たのつゝ刺名の胸中を急ぐ同門は好まも
即ちや論一合ひあはし小刺詞を書ねるは道
是すも文章ハ祖意古もよはり

一 古人の云歌の意をさく心は執得して中意と
まへて歌の曲調の内より案一きるまう外より
案一きるもまう又一物のよ小修りきるもまう其

一二を記す

春もやあやふそこの月と物
竹や映望うらむく月と友

乞ふ母を陽く福と内より命る業方がれは
卯の花よりけ毛の馬れ並ぬ

馬の耳をわめて寄し初まれば

け等如梅の外より命るく皆作風の秘決を

乞衣小はくしてぬう鴨の足

いさけくそ名りんふははくまを

乞ハ一物の上に作をや示さす一葉をこを

年のうちふ春を来よりう下を

あそややいんあうーとやん

ひうまのほもよさゆ梅の様

春を代の月を秋の夕くき

津のふれあやも人のふ屋々に

ひよしそちやれけの八きぬき

くさきうらうさきた中入ぬき

そらふてせ山の陽れ月

石は傳ふ

一字歌口傳

和歌口傳云一字歌ハ幾度も下の句に歌を歌す處
是初ハ一の歌之能治よハ文字おき物う下の句にさるハ
重々一一句に歌を能く満く扱風流小柄に治くを
重々いふ歌を賞しきうも虚實變化を記さハ
人情感る可なりたるハ悲の奇小其志のあきう
をいふも其まををいひぬめりとも人の心細る
詞の何やうも附と感動する人あり治うす

思ひつゝいふと可憐ハむせられ

なほこれ卯ハあとの意もね

のあつゝぬこの花やよれ文一

つきなつゝねとぬらういもよ

此二首ハ彼古何の宮とや記さうれ女を悲めいハ
清奇れあつゝなるさにあつゝいさらんうハては経
典始りしに何れ清奇を結ぶ「宮」ハその意
とあつゝやんやらん歌の奇もあつゝもけり治を以て
あつゝるハ口傳

曲は姿情虚實變化作用能治風作と云事
知つゝしてハあつゝいさらんやんやん
高砂草皮肉骨再治に記口傳

あもゆくと下の白す四かみの白小並ても昔は
此後の上葉只此を得て古実遠りぬやうなりと
兼歌あつこの事

一 兼歌と云ハ為てらりお歌もるを云ぬ葉根ハ面其
目を合て扱おと事うれハ粉骨の白も多う
魚一志うれハ上葉よおとへを魚さ秘歌を
とも人の廣賀あ小死る兼歌ハ葉と又別ハ葉
の泳物白合お共右のハ得る

組歌葉この事

一 組歌やと云ハ四季の歌を組なり百句うと春

三十句夏二十句秋三十句冬二十句と組魚葉
やうハ百句の内極重のハ得るハ根よ婉曲なり
とあとの事ハ得

探歌葉この事

一 探歌ハ其序よさう歌ハ根典ハ就下大
基小ゆるを向くあうさう其意の時魚うれハ
深く葉入多具を考ふあうれさうとあを葉
実を毎一寸此後ハ平話信後ハハ得て五得る
句をい守魚う寸信後平話なりあ一入物の平源
葉実をさふさうあ初ハ中品の人あふハ得

白くは自之のふまゝに、毫もけ道に罪人、内雅、滅亡
の内、ほくやとく、其座の先を、又、年、齡、若くも
亦、道、先、軍、功、志、へ、同、合、す、い、守、る、く、我、志、を、
了、り、ん、ふ、ハ、一、座、も、支、を、ん、は、て、助、云、せ、ぬ、よ、の、こ、志、れ
を、一、分、の、換、り、一、毎、内、雅、中、も、宵、く、廢、人、や、い、を、
し、讀、よ、い、つ、同、法、問、し、一、毎、推、量、の、字、文、者
多、く、上、達、の、目、茶、を、い、く、記、事、へ、探、歌、の、類、再
掲、ひ、れ、式、再、掲、り、記、す

當座歌案のこのり

一 當座の歌と云ハ、探歌と云ハ、ておす歌ん、是、さ、大、抵
探歌小等、一、を、い、ふ、と、り、探、り、歌、の、尺、を、座、の、具
を、ぬ、く、ぬ、く、す、再、掲、り、妙、測、を、口、傳、を、い、ふ、

探歌當座の傳の事

一 歌、さ、く、し、て、當、座、而、り、せ、く、か、く、も、減、は、ら、場、の、目、よ
も、その、其、時、の、花、智、め、い、ハ、座、茶、又、忘、物、は、長、持
其、之、れ、あ、若、く、も、亦、の、比、石、亦、必、然、處、見、し、く、も、道、世
先、を、い、ふ、人、の、句、を、而、り、さ、し、て、お、を、を、見、ら、ふ、と、今、の
當、座、の、句、其、場、よ、お、魚、さ、り、と、も、書、お、を、さ、り、か、い、座、を
奉、へ、再、掲、り、當、座、の、法、を、示、し、口、傳

探歌當座の字の事

一多理の流りて延るる時と中との句小枕を繋ぎて
帯の云葉おめても一句入て中へ繋ぐ句と句はるを
隔はるれ隔句と云す臂とハ結末の中小枕月と云
その、はして入用なり紀その中も結末の傍と云
その之甚とく中との句は体の云葉ハさして後を紀
振めて三も一首の傍なりささる
古今 むえり枝よさから常言さくけを
明ももいささるハ際け
気まうけくの詞隔句く
多しち云

我思餘 どりてまやまらん

気がきくとしてそさしい語あうを玉のこの入さうは
二首いあしうり隔句のよなり又

梅の花ときともんてすえの

あよふり君のちへ多ぬきくも

俳諧ハ是を常用の用や云々章ハ山々に多用く
歌葉中も此を離るの一場世汲い新要くあふふ
出と口傳を更屋く

舊門百箇條初篇を

紀行の擧ぐ事

一 紀行の事と相おみも舟楫の事多し中亦費之長所阿佛
 の尼の記曾大抵極式なりし我佛湯あり右念行の細尾
 又ハ庚午の紀りうと乞を擧ぐ其國を兩ふわて南
 意昂姉の文章句括括扱亦常し佛僧も吳りり事と
 再篇小記り初て工扱の子節更くよあなりよを能く
 者へ知て古人の身行とを命り今人の化とを評法を盡し

贈答の擧ぐ事

一 和方の情も云贈りかけおん答ハ是れ意より返りけり切者

のふらふらふらしてゐるひと二字此意もなほ一併記す
者句をたゞしきしとて又ハ脇をくわいしあり其句り
無して只傳る事ニ再篇に記す

挨拶の事

一 世に寄致句亭に細といつり或ハ隠者を訪ひ旧交を語ふ
ホ又ハ主人一掃きこき席に付坐へ致す小挨拶を月と
協小甚無言立一ハ結言の挨拶を語すといふも亦
の業一こゝ変化の意ハ一併記す

慶賀の事

一 或ハ幸賀新宅何事ハ賀めもその限を知て賀禮の意
不及といふ寸先を或賀者一お後のとあるは忘れ
詞を自もん身を致すものなり人小見せまか付と思はる
語をよのこむわから小考逸曲をよむといふ寸再篇小記す

饗別あきの事

一 饗別ハ島の饗くるあきの人の語(き)はるは是又其人の限
より入一隠者を送る歌ハ其人あるハ常折の人を送
とは知らりり入一右各流句再篇に記す

画賛の格と事

一 画賛の格と云ハ歌の句れとく錦家ハ工事を危うくす
功者のよハぬい一紙りくす画の外的事を言ひおて

百首もたう〜九夜せんは

等慈あ人

詞花

何事もよきまんじのうらた

ゆき山よりくる我身もろか

池水す氷

續古

沈水をいふあまの頃とて

ふちきりやよの氷とてうらん

是亦を秘教と云定處の後川百首の歌ハ秘教百首
と云やうらり初人の内ハとめくありてうらりす功者も及
びかう〜とてその歌秘教古の二つは佛の流句再命記

追善の句の事

一 追善の句ハ授受無常此書〜と云ハ授受〜と云
ハ限をなく〜と云ハ忘亦の忘亦ハ忘れぬと
〜と云ハ經天の書法もあ〜と云ハ再命記

秘教の句の事

一 秘教の句と云ハ佛法の事納ハ勿論也て或ハ禪窟ハ
入と浮屠ハ吃る等と宗門の心ぬ〜と云ハ佛

述懐の句の事

一 述懐の句と云ハ〜と云ハ自己の述懐よ〜と云ハ世を
洞より来る〜と云ハの心ぬ〜と云ハ徹書記ハ相の心ぬ

世秋の秋九月と稱する類々くは傳ふ一々懐旧
多傷を常小答るるを一々再篇よ記す

夜実の句れ事

一 夜実と云ふは古く有り有る事ハたとハ語り
あるもこれとありしあり信はして用事も多し
の平作らる内ハ古実の句れ一入るる一ハ記
再篇よ記す

古事古歌再篇の事

一 古事古歌は元より代流根より有る事ハ古
事一ハ古事よ事れをやいふる事ハ古事ハ
再篇よ記す

名所よ夜実の事

一 凡名所を傳ふよ古実の國々の奇花教と云ふ事
れれを世秋の傳授を別と云ふは信よんぬ名所ハ
せぬよしよ是其指式を云ふは信よんぬ名所ハ
大内の公卿いつて古実の果荒雲の階より古
らんやいよんる名所の用をも云うは漢古の
盧山西遊りて凡名所をも世理と穿鑿して
しよんるは道の多物といはれりんぬ名所と云
いよんる事らるる風雅ハ授きよんぬ名所と云
系相答とも云くは古の傳授を再ぬ一

さういふる交際う京の下流ふ
花より初かきつるをりて
夕まれを神道の社風身よきて
うつゝかくやうの深草のま
東路を朝まらるまの草席や
まのつゝかきつるをりて

等類の事

一 等類の部と云ふ他の句は似る他は如かめもあつて
を禁もふれも切者のとよ初人の志りくさる

同の何ゆり中品以下の次りの人と人の句は似る句は
りふゆるとすとん得るたると初すて同
姿を云いおきりとも古人を人の句は似る
止むゆるその句はゆるゆる事うハ文念の事
近世多く代の句を振をうり多言を付るは
西もやうもあそんハ生涯風流よ今事あし
甚懐むへー建春門院の事との分合よ宮路れ
落葉といふ歌めりれ改

初めハまゝの事あてるは

いふち散くくち河の関

後惠をゆくりんをらきさふけりハ能因ハ秋風を
物く白河の言といふや似多ゆりされを人可あま
船りとと釋とまふまよあしや斗ひやうさ
さきやうらう定家ハの刺めて物よやうらとらとさき等
物よあし口傳工業の法あり

しまらんと妻や整りし月の

をぬれ月や男麻唱なり利

けあハ 伊新の伊合小曉の床を御りやう定家ハ
高尾よ難きききて素夜うやぬの月をまらあつる
うかといふ小等歌し是又再篇は傳授と云

千服一列の本

一 事さしに子服一列の格といふ事さし是ハ誰も彼も
好むといふ事ハあし誰も其の存ありて孫一
る物ハはきはとて失事なほとて理をいふ事ハは
あし再篇はけ格を離る事ハは口傳妻く示之
一句元活の本

一 け傳甚大切の秘事ハ詩歌ともふ是を高用とて
始なる初篇は示す也

秋の節ときれあつと月のつら
あつあつ新ハもむも新

叶か岳嶺玄旨の派割よまふも遊もかー也
あしを歌うる一と一遊一字ふ令の活句と

川海をあわめハ水のぬき

叶句踏の物さうかともさうハ教句ある一と一

叶合 何れいの花の咲る 石臺

叶句苔む石臺といふ活句なり一と一是又各一字

子令といふ一と一於体用は

ハ重恒三曰 君のみ文字は

一 文字六人の白は言息は私思哀樂の歌さうさう

或ハ大将の想ゆひハ勇者の新思白も知るのみ

叶原よ和方も先初文字さうさうのうー何ー

あしとの敵之君のみ文字の格

新古今 能波さみーまはのやの

是君ハ五文字也 難はほほあけちやうまも威有

何のや白鼻はあす

舟篇よは源一

ハ重恒三曰 一首ハ

一 君のみ文字は

新古今

まぐやいさうハのたうたも 富川

まよよあささうさういめか

叶歌ノ 剛やうの 難ハ五文字也 何の五文字は

ハ重極ニ日
又首切五文ハトシテ
忍ぶ事也
五日月ハトシテ
是五文字ニテ
此心ニテ
如所
以上悦目
抄出タリ
大ヤカ
ニクシク
アツク
去シト
の二
フ
ニテ

たりろふ秋の節寂や亭とゆり 翁

有ぬる則悦目抄墨依作山と云リ
初秋ハ文字の事
初秋ハ文字の事
初秋ハ文字の事
初秋ハ文字の事

初秋ハ文字の事
首切ハ似タリ
五日月ハたかくその煙うちとる

五日月ハたかくその煙うちとる

右の因

可採ハ又文字の事

傍秋も心可採ハ又文字の事

自られぬ年よめし人の慶賀行禱号小船と付
心借かしてみたり小工案をうす寸再為ふ記

ハ重極ニ日
親ハ句
親ハ句
親ハ句
親ハ句

親の句と云ふニ又之正親と云ハ詞の連続

正親の句ハ事
立と云ふれいある山の巖小と云
古今行平

初秋の句ハ事

親ハ句
親ハ句
親ハ句
親ハ句

是ニモ又二様有
如首相通五音相
連声也五音相
通ハタトハハ
見くぬまきくきくらかくく
はのくくとをちの弁
是又ハ句ノクサリ

君火焚けりよきよの足んきまらけ

是を二字切と云ふ

子もらよきよの足んきまらけ

是を三字切と云ふ

梅菜菜鞠子の宿れどう汁

同よきよの山初懸

是を三液切と云ふ

夕アめも湖めもつす凡の花

乾懸も宮也の瘦も宮の内

是を二液切と云ふ

右七ヶ條再々能く口傳ふ

ん切よ多名事

十八の切字の如ふん切と云ふ時々中の切接切二液切

三液を早しや云敷上液よんを初し中液は初を

下液よりんを早しや云敷初てん切をきと名目ハ初字

の便と云ふ

多くてもあるへきものを煮椒

兼く友を今敷の月夜

是を早しと云ふ

桐の本よ鶴鳴り塚のうら

句讀の切れり

一 句讀の切と云々

人も見ぬ言や可みのことこれ柳

再篇小口傳多し

無名の切れり

名月れ花いとそく綿島

四方より夢吹入して鳥の海

是を無名の切といふ初て名人の撰ゆて尋常の

人の及ふ所にあらず切字のよき先黄庭もあさ

やう小字も極よい守屋一修録の後二十年切を

以て自解と云解まらぬと云い初て再篇小口
傳の

右條くを初て高流上座の人ハ知屋が事あり

乃不識ある志をもて初心中品の障りかとなりて

世に蕉門の風雅小口傳の人多しと云い初て

秘授といふも初てむすび初て先初篇は是を記

す初て再篇の傳を得て始て能得成能人ハ

いふと云い初て他門の人と云い初て能得成能

規矩ありと云い初て能得成能の事ありと云い初て

人ハ其ハけ書法見多内には是を初て

とも亦小佐より色を移りあつてあつた風流は只
まろふ紙やうへ——知るべきをあつた書とせんを海とふ
知るべきの教やうへ——又云世書は書写のあや
ゆりありの書肆は若て我ら門を訪ひた身は魚
風流はきくまふ紙やうへとれ二字の師といふと
陸はうへんや風流は只まふ紙やうへ——や五株書

福三百思を邪と改め経を唐紙小

初くまふ紙やうへとれ二字の師といふと

そまふ紙の紙を改め紙にのく

春は日にほをうへ——のひさふり

まろふ紙初くまふ紙を改め紙にのく

炭俵小さの紙を改め紙にのく

例は理居とれまふ紙も改め紙にのく

道理と人情の理處となくん得んハ
一歩千里ともいふ處へ只身に向ひても
下手しを離れ善小對ても下手を捨ふ
鳥も嘯ふ高小臨む視聽言動世法
の中皆從證に於ふ處へ遊處を
なく生を盡ふ處へなく壽へ
待亦を人情を識みよとて下れ
一道とらふきりともや今世の中に
從證を如人も稀めて知る人もあ
かり處し予久くも必岳隈の机を
倚りて明著に推敲法何れも同字
の三あ子是や可ならん彼や吾
れも母を云ひ念ふ句を
乃た母を云ひ高刺を語ひきこふ

あきこはけふさきハハ利詞を見ふ
知く物人ハ教勺花ハ川の空や
あらん御他門ふりあにわす
是吾の家乃至實あき唯あ
阿そふやいふふハ幸禱の松を
花より勝あふと 蝶舞を人書

梅

た 緒

一二輪人をうふあ梅の花

花里

右

梅咲あ更す秋多ふ書戸か

五株

刺よ曰たそふ喜窓の梅乃あ面いとさき
南枝終ふ日色を得る花あぬと物
人の心を動くきるとハ何あつらけあ守
和号ハ風流も初らふとねふ詞信之

大より軽して云下交字さくはる梅の花も
 うらまきくきもたの人臨事云終見之花友
 蕨花とも侍きそ一二輪のみ文字に解定
 百花の魁きりけ花出春の人情を動し初六
 梅は作定せり梅は梅の花牡丹は初六とか
 ようせの葉さへハ例の世志中には出する風舞
 たり魚一 右又云嵐音々 梅一見一輪は
 鳴さけり等歌るらん 凡言て云凡等歌
 の事ハ輕政ハの自河の詠にささる梅の傳を
 工業れ乃節拍歌あのみさる梅よりあふと

きさくハ梅一見とハ歳夜も是るさ詞
 嵐雪々歌言ハ梅のうらまきも梅の歌
 雨神の一字に素逸をゆりけりハ之の葉
 音をあふりさ一二輪の力をりて天地人
 うらまきとと非梅の梅は梅の梅を
 けけきりけり梅の梅の梅の梅の梅の梅
 勺足骨も此梅のうらまき
 刺者云あも梅さくはは人情春色に
 富めて梅のうらまき初六梅の梅の梅
 か〜梅は梅の外にさる梅の梅の梅

の白き白ひやくしを 右を西宮夜静
百花香といふ春怨よ似く文字夜多
月下れ一曲斜よ雲和を抱く何と
春れ秋思能き名所もなほく
たの一二輪くハ待奇れ人とうふく
た

月を吐き龍志門くたり 柳の花 巴峽

右指

千金の晴まの屋く梅下 蝶舞

たむじほしめ名もさ外龍柳よさか
古木の鏡いなり一更山吐月よの詩歌
はてて又文字さひく並得くう後く
志門くくと云くふ月黄昏れ風京員を
ぬくめり 右を一列千金れ春宵月ハ
孫くくを暗不持く方子柄と戸漁し
たより秘して云只梅の春と云屋記句ん
柳りりくやうしうハい後えさきくん
右陳く云柳の花と云時ハ直りつやま
とも梅下と云樹を梅れさきもりん

して其場の風をよみえりそ花も白く
見ゆき費らばさくらちかた下風を
寄せしとと云ふ小部

た又云け奇にうらを花の下と云ふ
梅の白小を定うた梅も花ハ
何事とも言ふれ貴教ハ梅よと多かれけ
誰かきよまおより花もさうと云ふ
定うとてとりし時花をもあつたさうと
け白の梅花にあつたさむいれ梅を凡
のふりや知へ

判者云想して梅の花と云白に花と云
つれしてハなほ白く梅と云ふても
ゆきとも文字を合せんきぬに花といひ
きりもさうやうれ亦も詩と録白也
和分と例語よのそふありけ白ハ梅の
時とも梅の花とも云ふ花のさうりハゆき
白之時も此も言ふれ時に通へ下と云ふ
し梅もれりの姿きうちき右翁
きり

たお

神垣や幸梅う濟記水

長河

た

梅光多初春に秘細みふり

太公留

た菅原の社もや感涼く疎影横斜
水清淺瑞垣の水鉢清くよ岩の空
あはれなうきとあはれ記新雪の字ねほり
うきと

右は老榦跡と半看花といふを来れ
春風忘るが年々歳と花お似よの観お
幾まは初春みり別来らん何とさ小悟
ぬくさきを持やう

たお

ふ臭の白く多さむし梅の花

松坡

た

松坡ふ梅よるふ

あつ川のあまは梅も苗も

赤松

白鼻のまゝ一寸と祖翁の眼もなつたさ
み梅の山々幾ひ初なる白の春の空さ
を丁不ふあまら物のまじりくんとは
又清く水色くさらけ合てまにありけり
右左のふれに對して紅梅の八重咲
了後ハあふくあり貝かと断路まゝの
貝そくもそてらやさうくあやまを
當そといふあそ牡丹の花の語を借り
て元もあきくくよハゆえは白く紅く
能くあきくく

たお

花く小暗をちりきく梅の花

信車

た

紅梅のほろや肥る 萩の面

楓樹

暗く梅のあつひけりなまらふ
み字に定りてあそ七文字にふれいをぬく
きけ暗香は造好風吹といふ系信
を後

右と夜東風雨砂花落知多少とい言
を初と云ふ時一きり也解く為継断
の山をうへ花初と云ふは一と云ふ
一春雨をうへん

左の人初と云ふ紅梅よと限へしす

右と云ふ自梅と云ふは紅梅ハ連し春
ふれ冬後を花初と云ふは長宗と云ふ二月
の梅と云ふは連しそのハ梅と云ふに初と云ふ也左
甲し初と云ふ也

たお

瘦梅と紙子脱せる言初 河目

右

禮者多哥と云ふ梅の言と云 沙路

たいう初と云ふの言初と云ふは
と云ふは初と云ふに瘦と云ふ梅の淑と云ふ
初と云ふは初と云ふは初と云ふは初と云ふは
の紙衣と云ふは初と云ふは初と云ふは初と云ふは

付夕名二月名来よ即り高海島海
白ふとり人へ

右名あ〜〜に社を修し祀を所ぬ
身固め志す所目よ八口内の変化を觀
んう月名れ虚実を何れい朔祭横
きへく詩を撰すともや文う名よ武に
多る記婆よを〜〜り〜〜記を
右名難為先難為後

た翁

蝶を来如地守、梅よ鳩の歌

北例

右

蝶々もや去第三四州蝶々垣 原阿

右昔見し妹々如き子ハ阿連（みかり）三
四州といふよ春宵あま〜梅花の付候
を阿とせしる名れ字名らつひも名
ある也と蝶々舞あま名るといふよ如き
たて蝶も名あ〜ぬ春のさむさゆき

宿の急鄙も何となく寂しき山鳩
の房如く梅雪の清くうねるに雪
をもあつたうねるをわたりて
云ふうく花をも人もあはれと云ふ
その一字解りあつて一語程清き
未知よの力ありて花はあはれ也

丸勝

醜梅玉兔紅

隈子

右

うく花すの身ぬ日や梅の雛の夢

雨烈

丸醜色回氷肌ともゆきハ梅ハ雛を
云玉兔の二字も奥あつて紅の色香
深く月下此大木眼最え終は五字乃
中ハ風系姿情画くありて一室あり
詩とあつた夢の画よりや古人も縁せり
右ハ常の身ぬ日も又わたりてあはれや
西行上人のあはれやうりてあはれと

あらしの谷のほろもかりの合ふふ
くさくさけれやうらふもくたのうらや
つらふもあはれありともあはれや
雪にうらやん 左志花実変化の
あつひはら 中巻詩中の画也見可多
しん

たの

酒造る水とゆへ種あつ柳

隈子

右

紅雲ふあき雀居る日和

朝史

たの棋陽池田仔丹みかこのい
由來はは古美人の物語を柳の松波
の化かきハミ村よ柳意の有夢よと
ふらふふあ一勾線綿して一字を
厚くは一字を減かゆるす
右を探幽の丹を合屏の古宗やり
誰も好く系曲紅白の色立よし
下み文字はと色は喜ををりん

言語の理窟をぬききる可き事
春を漸紅袖のさうとぬん以の百
の流管も東西は新更もまはさ
つらんた石一雙

たお

梅、あれ返しや凡に琴の音 雨烈

た

梅咲ぬ橋市問らん長谷宿 東松

いつきこれ結よりあし過初らん誰ら里より
みやい来つらんもに和風のさそへる
垣の隣もぬさしくこそ
橋市今ハさささささささ
町やうはし花鳥能情も記されゆきハ
こそ名の表め羨らるる梅もこそ比り
縁何きをろく魚しいつくや目とよぬ
あそくめいつきやんときのしよむ
ともた風流

雪

尾筋

雪の糸といふ雪傘の編

長河

右

黄鶴の酒屋見守る山路か

巴峽

井の音やかさるるなるらん山家集の
る中もわり流からあやうくいよは
又海へ一筆の流ハ倒のさむよし

能得れ伝を伝きうと云はし一旬月立
きふたをねく正風自然う姿その今
めし直し

猿を独熊次勢く深山路の衣玉味得れ
白いうるはく華香れ伝も中を照くよを
いふにそやと思はるる濁きる酒も人を
たよるまうや感懐深きう谷の戸か高
里別る舞旅人の醉や僧はんけりハ杖暗
たをる中人これ好ふふらんさうさう
たをやとせんとせん

望 望 梅

宇久野 梅 京極殿の隣れ内

臨車

古 梅

臨車の旁

對して

梅 咲くや 龜山殿のあくら酒

雀海

梅をく花とわくひの是乃思く何の邊
ゆくよれ春をすこえん 此法師や
吾の仇 誰よりと 思ふ人 ぬるま 流るるま
一 部の 親を 盡ふうと して 例の 事 事 坊も

葵の 朝ふ 魂を 入るる こと 終る 所
京極殿 法成寺 かと 見ふ こと 志も
とく ちの 事と 半 なる 今も 梅 季 事 事 事
後と 左ふ 昔を 憶ふ こと 終る 所
卯 事も 初め 見ん 又 大井の 人の 事
如 事も 宇治 里 太 八 郎 事 事 事 事
万 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事
吾 風 春 水 一 切 事 事 事 事 事 事 事
解 ぬらん 万 事 事 事 事 事 事 事 事
う 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

た 緒

今春鳥を吹ぬくしほ松の風

水海

右

楚雀やふきつさる客の名

松坡

このまみ初きる言の砂れ松と岸の名
さうりしあ又松何法師の出てやうを
の春をふかす人の心も作りあやふを
うつらう松風の吹かすといはれ家お

一息出るから感ぬくしほのあつひも一ひを
右ハ川風をむくはらうかえを敷れ友を敷
て水も遠くとも山もよふ初きるうらん
やうとくハやめれとたの松のまもさあひ
うらん

た 緒

聯子と雪ふり紀の路は

朝史

右

黄多や葛西菜俣と市菜

原阿

たは和号山新宮城外海近く山深く
江南の橋もさうやう無昌の池梅も柳も
松もまうて草辺よ田舎も町流るらん
名も多々勝絶揃もの暖も先初春
とや燈さる春色早焚の字「後」
たハ「う」志うれ名よ和「らり」直玉は橋の
きりど和かくの市人酒向町向の旗の
みや草葉といふ、ま今もまうてた
しくハゆれ、直の紀の路深和の元
況、京のよおを「ら」くやゆらん

お花

倉唐にくくく低く流の音
河目

お

高唐う目と暖く谷の坊
蝶舞

二、三、山岳をるめもあつ勢はうや
うく飛すれ流の名も和「ら」く
情多れ姿ちおさく十里の春をぬる
うすりや大小のを合く「け」

右と谷らうき御とに東山やうくいの
里らうき初るらうきあはらうき華比廠と若
ねとれ宿坊もや何じのり者利うんと
き記法ののゆのねあういよききききき
けん徳寺のへも指いぶらうきやあうき
左石山中れ海京宿ねらうきききき
魚川昔は西風れ玉を獲てうき
阿やをかせし

五株

うくねすう魚もうらうらうら

五株

心

け君、鶯、契情

沙鷗

枝くのふ今と唱やうらうら御の波
川邊のうくいあはれ春の目
うらうらうら鶯花もてまかり魚
子ねらう七文字解はれらうら

右と一日も冷君なる魚を食ふ
子猷く荒きや君といふより遊君
の初めは日河舟とも中作れハモ
縁より一も心曲良古歌故事
を聞き寸蕉門工楽の法各風姿
を得たり忘ぬきをいふ判志も
道と名にうらうらとあや作らん

た 拍

くさすよ初春の風と旭の角

桃里

身人、鶯、伯樂

錦江

たの暇ははるよりあそび
祖翁の山崎も梅もたのいあそび
りすよまろく嘗れはあそび

一毛大陽の光よ一羽羽の出ぬ
和音あやうとあ一字文字といふ
包くそとより竹よむきふ和音
うみくあて好く

あふ千里の春を己、和音に和音の
くまもねと落しきんあふささね
お望いひあをささねとれきさ双ふ
そのかきさあを和音あふ千里
馬ありといふに和合ささね
さあ雑詩上

た 鶴 ね

居 酒 小 謡 鶯

鶴 洲

花 梅

梅 ね 多 掃 も 春 意 山 崎 歌

錦 江

卯 内 雨 の 次 は 暮 あり けり けり けり けり けり けり けり けり
掃 也 梅 咲 春 とも けり けり けり けり けり けり けり けり
た の の 中 掃 あり あり あり あり あり あり あり あり
た 長 安 市 上 流 家 小 賦 子 李白 の

春奥能中此仙もいふ事あり居酒の
小謡とりつゝハ詠笑の家ハ一流も詩
奇の家をも何さむらると齒流あつた
句法何事ハたをや猪とせんとたふに
右もまゝと極善此表也一多之際の法
ありまゝ終ん彼集ハ吾ら家の古今
やういふ花実ハ由来も何事ハいつきを
物とすか

厄也

うく形おれ一濁す海井水

去留

右

薰梅タキモス黄鳥茶

楓樹

しきふもれ常にあつた山の井乃
あきくも人をとすえ一は初名の
香やう象月トねんま井れ
あつらよる岩あとのきくまをいふ

可し御一うす花も明身後の
らみさだのねよそうく清水の上に
おほいしん多と其角う陸合に評
せし山の井もいと船つ
右の合衣公と稱しき黄袍と云
まきにより名うれは常葉又た
和名よし世身をさるのせよ小唱を
海もよそうしは梅花と云記を
まきの常三光の價も下あるし

二三子ゆき花と名に控いま句を
せし御一昔も投し多判詞を乞ぬ
元和舟小判者を撰ふあをた日れ
備小ハわしきとも仇語と云とも又
櫻うりしそ評よ世にまきえは
師を得く惑いを能く舞はを祥
まきともあき地門のそめに替へる
の家よ花めんとせぬらよまの御
どうく免しそせし何れとまき昔う家に

百葉除れ鏡を照し一と示すを教り
向ふ事せしむる半にまの目見む
人ま罷の大やりを笑はる能も亦
沈沼ぬんや自も笑ふやうに

白岳老丈書

此後より早ぬ
沈沼ぬんや自も笑ふやうに

淇園

解く猫も舟よむる急やうなれ梅

鯨奔衝くを以て睦月の末衣更これ初なり
魚一と見えも音の如くや水の空
ゆきまむる急と急かにまれば光れつ
るのみにれも光る事あし梅の急何れ小
新踏踏うり垣の井乃末葉ふいじて
まの急と急を急やうに人ぬる

名やききむあかく此歌う花よかふ物う
名わくせく言乃一字更うううん力まう
よ路く終え風流の上にも早も又福の
あまううさかひ前年を云んとそれハ例の
理居小落安し喜あふ梅も園鳥の梅も
ともに造化の自然にそ世間れ人情の福を
ぬれる一場禪家小百人竿歌よ也すや
云ハ悦満う糸糸を傳ると云彼行地へ
さき昔梅と月下に冬景も揚るくあやか
との言賞よハ不場より

造化と悦満也

悦満ハ世法也

鶯名台利とあくる名写る

五株禪く云漢歌に毛隔播鶯名西三聲
なと云ふや後成ハ歌集う花をのこ
物ん人よ山里れ名写れ糸の春を見をたや
正月もいつくさきく山れ名しよこ自さふ
里ハ海草れ日向村海く谷の戸也羽かく
物人のきあともさく旭の光新く春の

わきに珠きりなるとも知らん初ると云ふ
言利初と云ふはつひつりもなる
云ふより言ふと云けり尚寧く初ると
以て叶うは別造化自然の見ず仇得れ
即ち如く極まりぬ又もきを今日世法
うれを別世法の人和の富のいを漸く創の
初るは我の軍初く師の力を評さよの命を
うもく初するも又世法うんや云

綴
五株

明和改元甲申十二月

日本橋室町三丁目

須原屋市兵衛

江府書肆

小石川傳通院前

鴈金屋儀助

